

ヤトロファの育て方

Jatropha

トウダイグサ科 / Euphorbiaceae

ぷっくりと膨らむ塊根と、珊瑚のように鮮やかな花のコントラストが魅力。実生からゆっくり育つ塊根の変化を、時間をかけて楽しめる植物です。

基本データ

🌱 成長期

夏型

🌡️ 耐寒温度

10℃以上が目安（霜は厳禁）

☀️ 日照

日なた～明るい日陰（花付きを重視する場合は全日照）

📅 播種適期

5～8月（気温25℃以上が安定する時期）

🕒 発芽日数

1～2週間が目安（条件により数週間～3ヶ月）

📍 主原産地

中南米中心（一部アフリカ・マダガスカル・アラビア半島・インドなど旧大陸にも分布）

🌱 難易度

🌱 概要・魅力

ヤトロファ（Jatropha）は、トウダイグサ科（Euphorbiaceae）のヤトロファ連（Jatropheae）に属する、約170～180種からなる大きな属です。そのおよそ3分の2が中南米（新大陸）に、残りがアフリカ・マダガスカル・アラビア半島・インドなどの旧大陸に分布しています。属の中でも亜属Curcasはほぼメキシコ・中米に集中しており、この地域が多様性の中心地とされています。

属の特徴は、傷つけると出る乳液（ラテックス）、互い違いに茎につく葉、そして雄花と雌花が分かれて咲く単性花です。なかでも人気を集めているのが、乾季を生き抜くために発達させた塊根（コーデックス）を持つ多肉性の種類で、上部が細くくびれて下部にいくほど丸く膨らむ独特のシルエットが、多肉・塊根植物のコレクターの心をつかんでいます。

代表種

- ・ **サンゴ油桐（J. podagrica）** — 灰緑色でこぶ状に膨らんだ塊根が特徴。中米～南メキシコの岩場・砂地に自生する、ヤトロファのなかでも定番の塊根種です。
- ・ **サンゴアブラギリ（J. multifida）** — 深く裂けた掌状の葉と、鮮やかなピンクの小花が集まって咲く花序が魅力。周年開花性があり、暖候期に見頃を迎えます。
- ・ **J. berlandieri（J. cathartica）** — 米国テキサス州からメキシコ北東部にかけて自生する塊根種。冬は完全に落葉して休眠する、めりはりのある生活史を持ちます。
- ・ **ナンヨウアブラギリ（J. curcas）** — バイオディーゼル原料としても世界的に研究された種で、雄花と雌花の比率がおおよそ29対1という特徴的な花のつくりを持ちます。

SEEDSTOCKでも、サンゴ油桐やサンゴアブラギリをはじめとするヤトロファ属の種子を取り扱っています。実生でぷっくりとした塊根を育て上げる過程は、この属ならではの醍醐味です。次の項目からは、置き場所・水やり・用土、そして発芽のさせ方まで順を追って解説します。

重要な安全情報：ヤトロファ属は全草にホルボールエステルとクルシン（**毒性タンパク質**）を含み、有毒です。特に種子に高濃度で含まれるため、取り扱いや保管には注意が必要です。詳しくは「病害虫・トラブル」の項目をご確認ください。

☀️ 置き場所

ヤトロファは日当たりの良い場所を好みます。花付きを重視する場合は、できるだけ全日照に近い環境で管理しましょう。明るい日陰でも育ちますが、光が不足すると茎が間延びしやすくなります。

春～秋（生育期）

戸外の日なた～半日陰で管理します。室内で冬を越した株を屋外に出すときは、急に強い直射日光に当たると葉が傷むことがあるため、1～2週間ほどかけて少しずつ光に慣らすとよいでしょう。風通しの良い場所に置くと、蒸れによる根腐れの予防にもなります。

冬（休眠期）

ヤトロファは耐寒性が低く、気温が10℃を下回ると株が傷み始め、霜に当たるとほぼ致命的です。秋、気温が下がり始めたら早めに室内の明るい場所へ取り込み、最低でも10℃以上を保てる環境で管理してください。「6〜7℃程度でも冬越しできる」という情報もありますが、これは順化の進んだ株や地域差を含んだ目安であり、個体差も大きいので、初めて育てる場合は安全側の10℃以上を基準にするのが無難です。

J. berlandieri (J. cathartica) のように、冬になると自ら葉を落として完全に休眠する種類もあります。落葉は株が弱ったサインではなく乾季を乗り切るための自然な反応なので、あわてず春の新芽を待ちましょう。取り込んだ室内は空気がよどみやすいため、サーキュレーターなどで軽く空気を動かしておくと、蒸れや根腐れの予防にもつながります。

置き場所を移すときの注意

季節の変わり目に、屋外と室内を急に行き来させると、光量や温度の変化に株がついていけず傷むことがあります。春に屋外へ出すときも、秋に室内へ取り込むときも、数日かけて段階的に環境を変えるくらいの余裕を持たせると安心です。

冬越しの成否は、置き場所以上に水やりの絞りに左右されます。詳しくは次の「水やり」をご覧ください。

水やり

ヤトロファ栽培でもっとも注意したいのが水のやりすぎによる根腐れです。乾燥地に自生する植物なので、鉢内に水が滞留しない管理を徹底しましょう。

生育期（春〜秋）の水やり

用土の表面が乾いたら、鉢底から流れ出るまでたっぷりと与えます。生育が旺盛な時期はやや乾きやすくなりますが、それでも「乾いたら与える」のメリハリを守ることが大切です。目安として、暖かい時期は週1回前後、真夏の高温期はさらに乾きが早まることもあるため、株の状態と用土の乾き具合を見ながら調整しましょう。風通しの良い場所に置き、水やり後に土が早く乾く環境を整えることも根腐れ予防につながります。

休眠期（冬）の水やり

秋、気温が下がり始めたら徐々に水やりの回数・量を減らしていきます。葉が落ち始めたら断水し、春に新芽が動き出すまで水を絶つのが基本です。休眠中に水分が多いと、低温と過湿が重なって根腐れを起こしやすくなります。落葉性の種類（J. berlandieri など）は特に、休眠期はしっかり断水気味に管理してください。塊根には貯水組織があるため、多少の断水期間でも株が枯れる心配はほとんどありません。

肥料について

やせた乾燥地に自生する植物のため、多肥は必要ありません。生育期に薄めの液肥を月1回程度与える程度で十分です。肥料の

与えすぎは徒長の原因にもなります。休眠期は肥料を一切与えず、生育が再開してから施肥を再開しましょう。

湿度について

実生の幼苗や発根直後の若い株は乾燥に弱いため、生育期でも用土がカラカラに乾ききる前に水やりのタイミングを迎えるよう、こまめに様子を見ておくとう安心です。成株になるほど乾燥への耐性は上がっていきます。

水やりに迷ったら「もう一日待つ」くらいが安全です。ヤトロファは乾燥への耐性が高い一方で過湿にはめっぽう弱いので、控えめな水やりを心がけましょう。

用土・植替え

ヤトロファには水はけの良い用土が向いています。過湿を嫌うため、排水性を最優先に用土を選びましょう。用土の保水力が高すぎると、根腐れのリスクが一気に高まります。

実生・幼苗の用土

種まきや小苗の時期は、清潔で目の細かい用土が向いています。赤玉土（小粒）：日向土（軽石、小粒）＝6：4程度の配合が、水持ちと通気性・清潔さのバランスがよく扱いやすい目安です。古い用土は雑菌やカビの温床になりやすいため、実生には必ず新しい用土を使いましょう。

成株の用土

ある程度育った株には、赤玉土を主体に腐葉土などの有機質を控えめに加えた、水はけ重視の配合が向いています。目安のひとつとして赤玉土7：腐葉土3程度の配合が挙げられますが、置き場所の通気が乏しい場合は、軽石やパーライトを1〜2割ほど足して排水性をさらに高めると安心です。市販の多肉植物・塊根植物用の培養土をベースに、同様の調整を加えるのも手軽な方法です。

鉢

素焼き鉢など、水はけと通気の良い鉢を選びましょう。受け皿に水をためたままにせず、鉢底から余分な水がしっかり抜ける状態を保つことが根腐れ予防につながります。塊根の見た目を楽しむ株では、根鉢がびったり収まる浅めの鉢を選ぶ栽培者も多く、乾きやすさの調整にも役立ちます。

植替えの時期と頻度

植替えの適期は、生育が旺盛になり始める春（気温が安定して上がってきた頃）です。頻度の目安は2年に1回程度で、根鉢に対して極端に大きすぎる鉢は避け、少しずつサイズアップしていきましょう。過湿を嫌う性質上、大きすぎる鉢は用土が乾きにくく根腐れの原因になりやすいので注意してください。植替え直後は根の回復を待つため、数日〜1週間ほど水を控えるのが安全です。

📌 発芽のさせ方

ヤトロファは種子から塊根を育てる実生が大きな楽しみのひとつです。発芽までの手順を押さえておけば、初めてでも十分に挑戦できます。SEEDSTOCKが扱うヤトロファの種子でも、以下の手順を目安に進めてください。

播種の適期

気温が安定して高くなる初夏～盛夏（おおよそ5～8月、気温25℃以上が目安）が播種に適しています。気温が十分に上がってからまくことで、発芽が安定しやすくなります。

発芽までの手順

1. **種子の前処理（吸水）**：播種前に、ぬるま湯（30～40℃程度）に種子を12～24時間ほど浸けて吸水させます。種皮が硬い場合は、爪切りやサンドペーパーで軽く傷をつける（スカリフィケーション）と、吸水・発芽がより安定しやすくなります。
2. **用土を準備する**：赤玉土と軽石（日向土）を6：4程度で混ぜた、水はけの良い清潔な用土を用意します。古土の使い回しはカビや雑菌のリスクがあるため避けましょう。
3. **播種する**：吸水させた種子を、重ならないように間隔をあけて用土の表面に並べます。
4. **覆土する**：種子の直径程度（目安0.6～0.7cm）の浅めの覆土にとどめます。深植えは発芽不良や蒸れの原因になります。
5. **温度と湿度を管理する**：25～35℃前後を目安に保温し、用土の湿り気を一定に保ちます。腰水ですずっと湿らせ続けるより、霧吹きでこまめに表面を湿らせる方が、過湿による種子の腐敗を防ぎやすいとされています。明るい間接光の当たる場所で管理しましょう。
6. **発芽を待つ**：条件が良ければ1～2週間程度で発芽が始まりますが、種子の状態や環境によっては数週間～3ヶ月ほどかかることもあり、幅の大きい植物です。焦らずじっくり待ちましょう。
7. **発芽後の管理**：発芽したら、直射日光を避けた明るい場所で、用土を乾かしすぎないように管理します。本葉が数枚展開してしっかり立ち上がってきたら、徐々に日光に慣らしながら通常の管理へ移行しましょう。

ヤトロファの種子は全草と同じく毒性成分を含みます。播種作業の際は素手で種子を長時間触らない・作業後は必ず手を洗う・口や目に触れないことを徹底し、お子さまやペットの手が届かない場所で作業・保管してください。詳しくは「病害虫・トラブル」をご覧ください。

🚫 病害虫・トラブル

ヤトロファは比較的丈夫な植物ですが、いくつか気をつけたい病害虫とトラブル、そして毒性への注意があります。

根腐れ（過湿障害）

属を通じて最大の栽培トラブルが根腐れです。水はけの悪い用土や過湿な管理が続くと、根や株元が腐敗し、黄化・萎凋から枯死に至ることがあります。海外の農園での栽培研究でも、過湿な土壌で栽培したヤトロファが土壌伝染性の病害によって数年のうちに大きな割合で枯死した事例が報告されています。「用土が乾いてから与える」水やりの基本を徹底することが、なよりの予防になります。

害虫

- **カイガラムシ・コナカイガラムシ**：茎や葉の付け根に白い綿状の姿で寄生し、吸汁によって生育不良を招きます。放置すると排泄物（甘露）からすす病を誘発することもあります。見つけたら歯ブラシなどで物理的にこすり落とすほか、殺虫石鹸や浸透移行性の殺虫剤、ニームオイルなどでの防除が有効です。
- **その他の害虫**：ハモグリガやカメムシ類などが報告されていますが、これらは主に露地・大規模栽培での発生例で、鉢植えの家庭栽培での発生頻度は比較的低いと考えられます。

徒長

日照不足になると、茎が間延びしやすくなります。日当たりの良い場所で管理し、必要に応じて少しずつ光に慣らしながら光量を確保しましょう。

毒性への注意（誤食・接触）

ヤトロファ属は全草にホルボールエステルとクルシン（リシン）に似た毒性タンパク質ですが、毒性はより弱いとされています。を含み、なかでも種子に特に高濃度で含まれます。誤って種子を口にしてしまう小児の事故が複数報告されており、種子1～4粒程度でも嘔吐・下痢などの急性の胃腸症状が出ることがあります（重篤化や死亡に至る例はまれとされていますが、油断はできません）。また、傷つけた際に出る乳液（ラテックス）が皮膚や目に触れると、炎症を起こすことがあります。

- 種子や苗はお子さま・ペットの手が届かない場所で保管・管理してください。
- 剪定・植替えなど株を傷つける作業ではゴム手袋を着用し、作業後は手をよく洗いましょう。
- 乳液が皮膚に付いたら流水と石鹸で洗い流し、目に入った場合はすぐに流水で洗浄したうえで、必要に応じて医療機関を受診してください。

ヤトロファの魅力的な塊根と花は、正しい取り扱いを守ってこそ安心して楽しめます。過湿を避けた水やりと毒性への配慮を忘れずに、じっくりと実生からの成長を見守ってください。

📏 栽培メモ



ヤトロファの種子を探す
QRを読み取る / seedstock.jp